＜2008年(平成20年)8月15日発行　第24号＞

ふくろう新聞

＜発　行＞
特別養護老人ホーム
淡路ふくろうの郷
広報委員会
洲本市中川原町
中川原28番地1
TEL:0799-25-8550
FAX:0799-25-8551

大きなイベントの淡路島まつりも終わりました。まだまだ夏本番ですが、ふくろうでは10月26日に開催する「ふくろう・ふれ愛まつり」への準備をそろそろ始めています。8月末にはまつりの際にお客様を迎えるかかし作りをします。

3年連続！淡路島祭りに参加

～総勢120人!!　デフ淡路・ふくろう連として～

先頭に横断幕を掲げて

デフあわじ連のみなさん

8月2日（土）淡路島まつりに、淡路聴力障害者協会と淡路の3サークルによる「デフ淡路連」と共に参加しました。

淡路島まつりは今年第61回を迎える淡路島の大きな祭りの1つです。毎年8月第1金曜日・土曜日がおどり、日曜日に花火大会があります。

ふくろうの郷開所時より参加しており、今回は3回目となります。まつりの様子は洲本ケーブルテレビでも生中継され、当日参加できなかった入所者もテレビでふくろうの人たちが映し出されると一緒に参加している気分になり、大喜びです。

見学者席で踊る先山さん

演舞場では、「手をひらひらさせる、手話の拍手でお迎え下さい」とアナウンスしてくださり、沿道の皆さんも合わせて手をひらひらさせ、たくさんの手話の拍手で迎えてくださいます。

ふくろうの郷入所者には島外から入所される方も多く、おどりを知らない方もいますが、島まつりをとても楽しみにしています。まつりが近づくと、淡聴協の皆さんにお願いして、踊りの練習をしています。

高齢で長く歩くことができない入所者がこうして毎年参加できるのも、地元中川原の地域交流会の皆さんをはじめ、志知高校の学生さん等、多くのボランティアの皆さんにお手伝い頂いているからです。昨年より、阿波踊りの本場である徳島の聴覚障害者が構成する「すだち連」が加わり、総勢120名の大きな連として参加することができました。

すだち連のみなさん

踊りに参加して

淡路島祭りに入所者の方々と一緒に参加しました。

歩いて踊られた入所者さんはもちろん、車椅子に乗って踊られた入所者さんもいらっしゃいます。

参加できなくとも、沿道で見学された入所者さんも居ました。

午後6時すぎ、踊りのスタートです。笛・太鼓のおはやしにのって踊り始めました。

皆さんとても楽しそうです。

真夏の暑さを吹き飛ばす笑顔で踊られていました。

見学されていた入所者さんも手を振って踊りを見ながら楽しんでいました。

職員としては、ふくろうの郷として今年も島祭りに参加することができ、社会参加できたことに意義があったと思います。

また、大変暑い中でしたが、入所者の皆さんの笑顔を見ることができ、皆さん無事帰って来られたことが何よりでした。

相良ヒサ子さんは沿道で踊りを見学されました。

当日は暑さで体調が心配されましたが、踊りを見始めると元気を取り戻し、盛んに手を振っていました。

入所者さんの皆さん方のよき思い出になることを願うばかりです。

ふくろうの郷の魚住さんと
大矢施設長

魚住登喜男さんは昨年に引き続き、今年もふくろうのまといを持ち、連の先頭を飾りました。

魚住さんはとても活動的な方なので、先頭が良く似合います。

丸山する子さんは、島祭りへの参加は今年が初めてです。

車椅子に乗ってですが、連を成して踊るのをとても楽しみにされていました。

当日は満面の笑みで踊りを満喫していました。

ボランティアの方と共に

デフあわじ連のリーダー土井さんｎ

京都からのボランティアの方々

花火見物

踊りに引き続き淡路島祭り最後のイベント花火大会にも見物に行きました。

今年も近くの高校から花火を見ました。

海からあがる花火に入所者のみなさんは歓声をあげられ、大変喜んでいらっしゃいました。

一つ一つあがる度にニコニコと笑顔になり「きれい」といっていました。

また一つ、皆さんに夏の思い出ができたと想います。

しかし、考えさせられる問題もありました。

途中で「帰る」と訴えた方を連れて帰ろうとしたとき、他の一般で見に来た人たちの車が道を塞ぎ、車が出られない状態になっていました。

高校に場所を提供していただくのは3年目になりますが、年々他の一般の方が増えているように思えます。

それに、2日続けての行事参加で入所者さんへの体調への配慮も改めて考えること、この2点が来年への課題です。

今年も場所を提供してくださった高校の皆様、お手伝いいただいた皆様、ありがとうございました。

（介護：神代）

中島さん、西田さん、松崎さん、八木さん

小林さん、藤本さん、ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱの森本さん達

相良さんご夫妻

作業給料日

中島さんには初めてのお給料です。

7月末に半年に一度、日頃入所者の皆さんが取り組んでおられる作業の「給料日」があり、皆さんに手渡されました。

ふくろうの郷の入所者の皆さんに日々の日課、自分自身のがんばりの対価として作業に参加されている*皆さんにお渡ししています。

現在、主な仕事は「紙ちぎり」や「紙すき」を行い「はがき」を作ったり、「わらじ」をあんでおられる入所者さんもいらっしゃいます。

他にも自身の居室で一生懸命作品を毎日つくっていらっしゃる入所者さんもいます。

これからもみなさんにやりがいを持っていただけるよう職員も手伝って行きます。

（作業担当職員）

何に使おうかな？　笑顔がこぼれます

戦争と平和 あの日を忘れない！

戦後63年目を迎え、どんどん薄れつつある戦争の記憶。戦争体験者からの証言は、戦争を知らない人たちに戦争の愚かさ、平和の大切さを教えてくれます。
ふくろうの入所者が経験した戦争について語っていただきました。
戦争と平和について改めて考えましょう。

勝楽佐代子さん

戦中はいつも、着物にもんぺ、防空ズキンをかぶっていました。

私と弟と、当時妹を身ごもっていた母との3人で家にいました。
私は耳が聞こえませんので、空襲警報も当然聞こえません。弟や母が空襲を教えてくれ、山に穴を掘った防空壕で飛行機が去るのを身を縮めて待ってたことを覚えています。

玉音放送を聴く人々↑→

そして終戦の時、家の中でみんなが厳かに姿勢を正し、玉音放送を流すラジオにむかってお辞儀をして終戦詔勅を聞いていました。

松崎敬治さん

↑戦中はみんなこの格好モンペに防空頭巾

高校を卒業し、ミナト精機という会社で飛行機を作っていました。
戦争でたくさんの飛行機が撃墜されたので、早くもっと飛行機を作らないといけなかったのでとても忙しかったです。
ご飯はもらえましたが、おなかを満たすほどの量はなく、いつもおなかをすかせていました。
ミナト精機では3～4年働いていたのですが、仕事を始めたころは聴者が多く、ろう者は少なかったのですが、終戦頃にはろう者の方が多くなりました。
同じ工場で働く聴者は徴兵され多くの人が戦場で死にました。
空襲でもたくさんの人が亡くなりました。私は必死で逃げ惑い、無事に生きることができましたが、両親は空襲で死にました。

↑　神戸港へふりそそぐ集中爆弾

辛嶌シツカさん

戦争は私が15か16歳の頃に始まりました。
尼崎に住んでいたので、大阪城近くの軍需工場で働いていましたが、空襲がひどくなり、あちらこちらの軍需工場を転々と働き終戦時は宝塚の軍需工場にいました。
戦後、食べ物は配給制でしたが、配給が足らないので、和歌山まで買いに出かけていました。
ひどいのは警察による検閲で、見つかると全部取られます。なんとか手に入れたさつまいもなどをふかして大阪駅に持って行き、売っていました。

↑　闇市の様子

当時は食べ物がなくて本当に困りました。

谷　信義さん

戦争は小学校1～2年の時でした。学校の先生によく怒られ、竹の棒でお尻を叩かれました。毎日泣いていました。

勉強中に警報があると、先生がメガホンで飛行機が来たことを知らせてくれ、学校の運動場にある防空壕へみんなで逃げました。

昭和19年に学校が閉鎖され、みんな親元に帰されました。小学校3年生のときです。

↑　市街地への爆撃

北風　章子　さん

戦争は終わりましたが、空襲で寄宿舎がボロボロになってしまい、学校を辞め、実家の豊岡にもどり、釣りをして遊んでいました。

私は父と一緒に舟にのり、漁に行きたかったのですが、父は「耳が聞えないから危ない」「綱引きの綱のような太いロープを使うから危ない」と、連れて行ってはくれませんでした。

そして洋裁店へ入りました。店の人からは「ろうは何回言ってもわからん！」と、棒でよく叩かれましたが、一生懸命仕事をしました。

戦争で、小3で中退になったのが一番悔しい。

戦争中14歳でした。私の家も尼崎にありました。空襲がひどいので、奈良の天理へ集団疎開しました。先生も一緒に行き、天理の国民学校を借りて勉強をしました。天理教教会で寝泊りしましたが、敷地が広く、お墓もあり、夜がとても怖かった。お墓で亡くなった赤ちゃんを燃やしているのを見たので怖かった。よく友達を起こして一緒にトイレに行きました。

昭和18年3月20日小学校を卒業し、三田の和尚さんの弟の家に行き、畑仕事を教えてもらいました。「肥えため」を持ち、ひっくり返えしたこともありました。とても臭かったけれど、「少しずつ運んだらいいよ」と、怒られなかった。

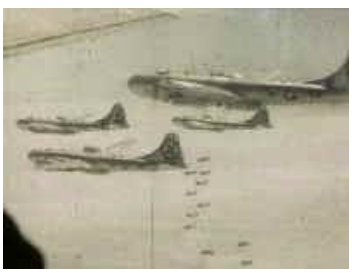
そして昭和19年、尼崎の実家へ帰りました。しょっちゅう飛行機が飛んできます。お父さんに起こされて防空壕へ逃げました。近所に爆弾が落ち、防空棒へ火が移り、父の頭が燃えたのでみんなで叩いて消したりしもました。

別の日、私達家族が逃げている時に、アメリカの飛行機が低空飛行し、お姉さんは背中から狙い撃ちされて死にました。私の目の前で撃ち殺されたのです。

戦後、父は食べるものもなく、酒を飲んでばかりですぐに死にました。

父は早くになくなったけれど、母は100歳まで生きて、私がおしめをかえたり、ごはんを食べさせたりして介護しました。母はいつも「ありがとう」と言って涙をながしてました。

海津　維久男さん



↑　空中からの爆弾投下

終戦は11歳の時。小学校5年生でした。

学童疎開で、倉吉（鳥取県）と三木に疎開しました。疎開先では同じ組同士でいじめあいがありました。

戦争が終わり、生き残った兵隊さんに戦争の話しをいろいろ聞きました。

戦争はやめたほうがいいと思います。

→ 学童疎開

中川原小学校との交流会

ふくろうの郷玄関で、交流を終えて

7月15日地元中川原小学校の生徒さんと交流会を行いました。

その時の感想文を書いて頂きましたので、ここに掲載します。

最初に手話でビリーブの曲をしました。おばあさんが、「だいじょうぶ。」と言ってくれました。

20人くらいのおじいちゃんおばあちゃん達がいて、ちょっときんちょうしました。

おいしいという手話をおしえてもらってやってみたら、おばあちゃんが笑顔でおいしいと、行ってくれました。あまり手話を知らない私でもできるということうれしかったです。

四年　本間　慈果（いつみ）

手話で「ビリーブ」の曲を披露

私たちはふくろうの郷へ行ってケーキを作りました。となりのおばあちゃんが「アーアー。」と言い出して何かなと思ったら、手をはしに見たててはしちょうだいをしました。それを見た人はすぐに持ってきました。心がつながってるみたいですごいと思いました。ケーキもとってもおいしかったです。お別れの時、みんなとあく手をして帰りました。

五年　田村　佳奈恵

ユニットでケーキづくり

一宮高校放送部

一宮高校放送部が淡路ふくろうの郷の取材を重ねて制作した、「ふれ愛～心ふれ合うために」という作品がNHK杯全国高校放送コンテストに奨励賞を頂いたとのことです。

制作に携わった生徒さん、先生よりコメントをいただきました。

構内講演会後のインタビュー

◆番組責任者　岩﨑　彩加

番組を作ろうと思ったきっかけは、校内の講演会で竹辺さん、勝楽さん夫妻の思いを聞いたことでした。色々な辛い思いを知り、同じ人間なのに結婚や仕事で受けた差別や偏見を聞いて「どうして？」って感じました。

そして実際に取材で交流をしてみたのですが、最初は皆さんが手話で何を言っているのかが全く分からなくてすごく戸惑いました。みなさんからも「楽しい」「うれしい」という言葉をもらい、とても感動しました。私たちが何かしたのではなく、交流することで逆に皆さんから色々なことを教わることができました。

番組制作は終わりましたが、機会があれば私たちはこれからも是非交流を続けて行きたいと思っています。

差別はあってはならない

◆部長　坂本　莉愛

人間同士が差別することがあってはならないと、意気込んで訪れたふくろうの郷で、最初は不安でいっぱいになったのを覚えています。それでも交流を重ねていくうちに、皆さんの笑顔を見る度に不安が消えていき楽しくなりました。

放送部として多くの人に皆さんのことを知ってもらいたいと制作した番組ですが、今はこの番組を見た人たちが私たちと同じように交流するきっかけになって欲しいという気持ちになっています。関わりを持たなければ何も始まらない。様々な人と接し、交流していく大切さや喜びを多くの人にわかってもらいたいという思いを精一杯込めました。

ふくろうの郷の皆さんには、春の藤の棚茶会だけでなく、これから秋の体育祭や文化祭、そして私たち3年生の大切なファッションショーに是非来ていただきたいです。一宮校からもふくろうの郷に行き、前に屏風作りなどしたように、また一緒に何か作ったりしてもいいと思います。

「やった～！負けた～」

ふくろうの郷と交流し合う日々

◆顧問　西山　真司

生徒達部員がお世話になり本当にありがとうございました。最初は何か放送部員としてできることはないかと意気込んでいた生徒達でしたが、きっと皆さんに様々なことを逆に教えてもらうだろうなと感じながら、生徒達を送り出した私です。

こうして始まった取材活動では、生徒達は正に皆さんに助けられ、教えられ、励まされたのでした。また、一人一人がふれあいを通して、戸惑い、驚き、笑う、そのことが番組となりました。

ドキュメント番組制作は、取材自体が人との交流ですから、関わった高校生は大きく成長することができます。今回、岩崎、坂本を中心とした数名は、手話という「ことば」を必死で覚え、そして皆さんから笑顔と多くの「ことば」を与えてもらいました。多感な年代の高校生たちにとって、ふくろうの郷の皆さんから受けたことは、これから生きていく上でのきっと「心の糧（かて）」になったことだと確信しています。

制作途上において、わが校の来年度からの生徒募集停止という残念で悔しい事態が起き、この作品への思い入れもさらに強まった生徒達と私です。それゆえ無理ばかり申しました取材や交流にご協力くださったこと、本当に感謝しております。

言い尽くせない取材協力・交流への感謝に加え、限りある時間の中でこれからも続く交流への願いを込めて、ふくろうの郷の皆さんと一宮校との第一段階の交流ができたことを記念して思いをここに残します。これからもどうぞよろしくお願いします。

すっかり仲良くなった竹部さん

制作番組「ふれ愛～心ふれ合うために」

ご招待頂いた、一宮高校の藤の棚茶会にて

食中毒の予防法

暑い日が続きますね。だからといって冷たいものばかり食べていると夏バテしやすくなり、食中毒にも感染しやすくなりますのでご注意を！

では、食中毒予防のためにはどうすればいいのでしょう？

食品衛生法で食中毒予防の3原則があります。

①菌をつけない
②菌を増やさない
③菌を殺す

①菌を付けない

手や、まな板、包丁などの調理器具には菌がついています。それによって食品に菌がつき、食中毒となってしまいます。そうならない為には、手洗い・器具はきれいなものを使うことが重要です。特に手は汚れが沢山つきます。洗ったつもりでも爪やしわには汚れが残っているので、手洗いは石鹸を使ってしっかりと行ってください。

②菌を増やさない

魚や肉は常温で放置はせず、冷蔵・冷凍庫に保管してください。また、調理したものはすぐに(2時間以内)食べるようにしてください。食べない時は冷蔵庫に入れるようにしてください。

常温放置は厳禁です！

③菌を殺す。

食中毒菌のほとんどが熱に弱く、加熱すれば死んでしまいます。調理は中心までしっかり火を通すことが大切です。75℃以上・1分以上の加熱をしましょう！

日頃からの心がけで、食中毒を予防しましょう♪

■谷村　正雄　さん
大正15年8月16日
(82)

■廣瀬　輝夫　さん
大正13年8月3日
(84)

■大鋸　實　さん
大正8年8月25日
(89)

ありがとうございました

兵庫県聴覚障害者協会主催のヘルパー養成講座の実習生受入れをしています。実習に来られた方々は、介護体験を通して技術だけでなく、法人の理念等、いろいろなことを学んでいただいています。

7月26～27日に実習で来られた、檀上知恵様よりお礼のお手紙と、5万円のご寄付をいただきました。

また、6月23日に見学来られた、西宮市社協高木分区より写真とお手紙を送っていただきました。

皆さんのお元気に笑顔で生活している様子。みなさんの生きる、動ける場所があることはしあわせと思います。まだまだ夏はこれからです。この夏をのりきって下さい。

ふくろうに来られるたくさんの方々が感じ取ったこと、学んだことを地域福祉発展のために役立てていただけることを期待しています。

～デフ・パペットシアター・ひとみ人形劇公演～

演目：ファミリー人形」劇
　　じいちゃんのオルゴール♪
日時：平成20年8月30日（土）
　　1回目:14:00～　2回目:18:00～
場所：三原公民館2F大ホール

※参加費

①4才～小学生	1,100円	(前売り　800円)
②中学生・高校生	1,300円	(前売り1,000円)
③大　人	1,800円	(前売り1,500円)
④①1名+②1名		(前売り2,000円)
⑤②1名+③1名		(前売り2,200円)

介護人の方は無料

＜問い合わせ＞
淡路ふくろうの郷　森岡
TEO:799-25-8550　FAX:0799-25-8551